

雑あ

草くさ

雜あそび

草くさ

寄 則

上野
茂
氏

合同歌集 ^{あら}雑 ^{くさ}草

昭和51年 6 月25日発行

著作者 代表（あらくさ） 尾 松 テ ル
（白 鷺） 隈 崎 烈 子
発行者 岩 渕 綾 子

製本者 製 本 所 平 和 堂
発行所 関 東 図 書 株 式 会 社

〒336 浦和市別所 3—1—10
T E L 0488-62-2901

序

川口 美根子

あら草の生命たくまし草の紫飛雪のごとくふえゆく真昼

光り乱り靱やかに翔りゆく白鷺を花びらのごとく夕映えは染む

「あらくさ」の会、「白鷺」の会と名づけられた二つの名は、私の歌集「空に広がる」の中の二首を偶然にも思い起させてくれます。

埼玉の県南、与野、南浦和あたりはついこの間まではあら草の茂る田畑が残っており、白鷺がよく飛翔していました。野田の鷺山の鷺は絶滅に瀕し、一時は農薬の為にまたとみに宅地化が進んで、もはや白鷺もめったに見かけることができません。「あらくさ」「白鷺」と名づけられた会をせめて大切にしたいものです。

地元だからと熱心にたのまれまして、私自身も勉強のために一緒に短歌会を続けて参りましたが、短歌を作りたいという方々の、己れにきびしくまた動く生きる姿勢を見守りながら、私自身学ぶべきものを多々得て来たことを嬉しく思っております。

この会には高齢の方々数人を交じえまた母子家庭の母として働き続けている方、身体障害者の友に熱い心を寄せ、或いは民生委員として地域の為に働き老人ホームの人々の支えともなつて忙しい日を過している方、また施設を週一度おとずれて薄幸な幼児と遊ぶ時をもちつづけている方、病院で働く方、図書館活動に協力する方などがいらっしゃって、主婦の座に甘えることのない生き方に私は感動しております。自動車整備工場に働く男性も中々ご熱心です。お互いにより影響を受け合い、ますます作歌活動に励んでくださることをいのって止みません。

昭和五十一年五月十日

目次

序	川口美根子	1
あらくさ		
銀の泪	井坂桃子	6
悼み	大沼徳子	8
円乗院にて	大森操	10
現実	尾松テル	12
九十才の母	岸本美知	14
生きてし証	沢本フミ	16
紅刷く子	阪とし子	18
バナナ	須黒汪子	20
草紅葉	関根千	22
むべの花	辻村富美	24
白椿	長島たか	26

白

あながき	三十五年	施設の児	津軽海峡	宝石の渦	野鴨の群	津軽富士	桜島	白鷺	冬の黄の花	綿雲	スキー靴	轍	石の上
	上園	宗久	山崎	鈴木	隈崎	川上	岡田		押田	保永	森谷	林	西山
	テル	八重子	ふさ子	敏子	烈子	愛	菜摘子		さい	ふみ	久子	みよ	数明
53	50	48	46	44	42	40	38		36	34	32	30	28

題
字

尾
松
テ
ル

あ

ら

く

さ

銀の泪

井坂桃子

寡黙なる夫にたち入る吾かなし妻の抛りどを欲りて久しき

被爆者の呻きみちたり資料館ただれし皮膚の訴うるもの

取りまきの中に生涯孤りなりと父を思いぬ父死せる朝

硝子一重戸外をしきる寒暖のもろき安息断つこともなき

親子四人意見だしつくして午前四時家建てることに心は倦める

鈍色の木綿のごとく空垂れて選挙のビラを人踏みてゆく

分身のかけらも見せぬ娘と成りて吾は批判の対象となる

一つひとつ小さきはまだ彩あるに毳崩れゆく紫陽花の藍

ながく咲きし悔に汚れし紫陽花に吾をたぐえて疲れて居りぬ

ベルトゆるき夏服の中風ぬけて笹群の揺れ移りゆく谷

粉雪刷^はきしごとき雲ありあたたかく堤のはてに二月去りゆく

緋は茜に静寂が冬の空しめて裸木の影を移してゆきぬ

坂下のゆくてに寒き夕茜切り絵のごとき木々の影立つ

憎むなくただに静かな宵ありてほぐれゆくなる浜木綿の花

野火止めの樺林に風鳴りて朽葉ふみゆくは通^つ夜の客なり

通夜の家は廻りに家具を積み出し樺林に星凍る夜

闇をわかつ一樹にさやぐ煌きは銀の泪よ雫は揺るる

母訪えば架空の話に瞳美しいつか呆けのまなことなりぬ

悼　　み

大　沼　徳　子

友の訃を聞きたる夕べ桐の花薄むらさきに匂ふが如く

君の訃を聞きし五月の彼の日より桐の花咲く淋しさを知る

老い坂をまろぶが如き五月なり母病み友逝き師も死に給ふ

抱き上げてベッドに脱がす母の足袋^{たび}足も冷たし五月といふに

たよりなき生命と想ふあけくれも湯に洗ひやる母の肌よし

点滴の音のかすかにひびきゐて目醒めぬ母と二人ゐる朝

うつつなく病む老い母の髪梳けば毛はさらさらに掌をすべり落つ

コスモスは色よく咲けり長病める母に見せむと床ずらしやる

夢うつ病む老い母は唐突に唄うたひたりふるさとの唄

恍惚と唄ふ母の声たしかなれ吾は咽びつつ手拍子打ちぬ

病み呆けて意識遠のくあけてくれもなほ羞ぢらひの手を動かさむとす

こと切れしそのたまゆらの静けさは霜月八日夕暮るとき

九十年今は畢りぬ山茶花の散り敷く夕べ母は眠りぬ

遙かなる浄土の空か夕あかね茜色増す旅立ちの宵

いたわりて衣着^{きぬ}せ換へるなきがらの未だあたたかき掌を合はせやる

やがてまた吾にかへりてもの言はむ死亡診断書破り捨てたき

眼に痛く小さき紅^{べに}は輝けり看護^{みごり}に明けし朝の水引草

水引の紅は静かに秋冷えの朝を咲き立つ母の忌近く

(旧仮名遣ひ表記)

円乗院にて

大森

操

風さやぐ樺木の間の青空を流るる如く白き雲行く

巨き木の泰山木に点点と明日咲く蕾すずやかに立つ

境内の棟がうちの樹下たたずめば風渡る時花降りかかる

さみだるる日のつづきつつ庭隅のしだはひろがり翼の如し

雨蛙八つ手広葉にとまりいて三日目にしてややに鳴き出づ

かいかいとのどふくらまし鳴く蛙ひる独りいて聞けばかなしき

円つぶらかに枇杷は葉かげに育ちつつその黄の色はいよよ明るし

百日紅の白き花房たわわにて日盛りの中さゆるぎもせず

立秋の今朝さわやかに向つ家の樺のどこか蟬鳴きはじむ

揚羽蝶まい戻りする百日紅のうすくれないに日の光澄む

いく百のトラック並ぶ草むらのやみに浮びて月見草咲く

榎の木にはい上り尙のびつづけ垂れ下りて咲くのうぜんかづら

黒黒と銀杏並木の立つあたり明るくなりて月の出近し

ゼラニウム花の終りに近ければすきとおる如くれない深し

ほつほつと八つ手の花にしぐれ来てうす日残れる夕となりぬ

落葉ふみて雑木林に立つ我に声かけて行く人も老い入

裸木の繁るも中にろう梅は花を綴りてはなやぎて見ゆ

烏瓜一つ縫りしねこやなぎの銀色の芽に春まだ浅し

現 実

尾 松 テ ル

不就学の生徒を家にたずねあてぬ七人姉弟駄菓子食べおり

学区外へ入学させたき母親のしどろもどろの嘘も聞き飽く

学費の不足補う故に荷揚げすると手紙に告げこし子に送金す

家出せる父の顔をも知らぬ子が家具屋始むると父の職継ぐ

来年の入学を控えそれぞれの身障児の家今日も尋ねき

背髄の破裂という子を尋ね当てぬ装具の先に小さき靴あり

盲学校に入学させるを拒む母の意志固くして頑ななまで

来春に就学すべき全盲児に二回目の会議も平行線のまま

三十人の教師の誰が引きうけてこの児を見るやついに声なし

全盲の児童の入学結論も出ぬまま健康診断日迫る

新一年に入る喜び母も子も居並ぶ列に盲児の子も並ぶ

車椅子に乗ることなきとあきらめしに賜わる喜び声はずみおり

四十年青空の下を知らぬ友の車椅子に乗る喜びつたう

訓練に耐えねば乗れぬ車椅子に乗る夢むなしブルーの服も

麻痺故に母にゆだねる友なれど生理の痛みに痛みどめのむ

萎えし手の痙攣おさえ手を縛る母にゆだねる友を見て居り

ばさばさに渴いてゆくごとき一日を脱ぎ捨てる服放電し鳴る

日銀の引締策を緩和するとニュース流れきかわりもなく

九十才の母

岸 本 美 知

真夜中に金色夜叉を読みたしと九十才の母は言い出づ

金色夜叉を声たてて読めば思い残すことなしと言う夜の明けつつ

櫻見て櫻餅食べたしと逝く前夜母は言う夜更けに餅はなかりき

六人の子の臍の緒を入れし母の柩は重き鉄扉に入りぬ

母のため智恩院に来て拜みたり受洗せしわれ京は雨なりき

わが面に母を視ると妹は言い妹の声は母の声に似る

故郷はわれを客とす帰りこし庭にシヨカツサイの花溢れ咲く

土を手に持たげるとく芽生えたる水仙かなし夫の忌近く